



ボルネオで考えた東南アジアと日本

中 嶋 嶺 雄

一時の中国ブームが鎮まりかけると、東南アジアにたいする関心がわかに高まってきたようだ。今日、東南アジアは、一寸したブームになっている。日本人にとって、もつともエモーショナルな感興を呼びおこす中国への期待や悪しき郷愁が思いどおりにならないことがわかってきたためであろうか。東南アジアが今日のように脚光を浴びている状況は、いま流行の言葉で表現すれば、まさに「南進の論理」そのままでのようである。だが、このようなブームほど、危なかしなものはない。中国ブームにしても、過般のブームのなかで、日本人の中国認識が改めて深まったかどうかは疑問であろう。日中国交が実現すれば、日中間の懸案はたちどころに解決して、

すべてが順調に推移し、中国旅行も簡単にOKだ、と考える方が浅はかなのであって、今日の中国にそのようなことを期待しても無理であることは当初からわかっていたはずなのに、無理が有理であるようなムードがついて高まってしまった。それにくらべると、東南アジアの場合には、中国ブームのような激発はないが、旅行も自由にできるうえに、工業化社会のストレスや倦怠を癒やしてくれるだけの素朴な牧歌性やロマンチズムにも充ちているし、第一、アジアの現実のなかには欧米諸国にはない、驚き、がいたるどころにあるのだから、静かなブームが起ったとしても不思議ではない。

外交的にはまったく順位が逆転していたけれども、田中首相が米・中・ソ三大国訪問のあとASEAN五カ国を歴訪したことも、中国の次は東南アジアだ、という感じを抱かせたであろう。そのような田中首相のアジア訪問にたいして、タイとインドネシアで激しい反日デモが沸きあがり、とくにインドネシアでは予想を上まわる暴動にまで発展したことは、いやがうえでも東南アジアへの関心を高まらせずにはおかなかった。小野田さんがルバング島から劇的な生還を達成したことも、アジアへの関心を倍加させたであろう。

だが、このような出来事の連続のなかにおいて、日中国交の時期には、すでにアジア各国に、「東京⇌北京枢軸」形成への警戒と反発が潜在していたこと、インドネシアの反日

暴動の背景には、スハルト政権下におけるアリ・ムルトボ前大統領特別補佐官と軍のスミトロ將軍との激しい権力闘争が存在していたこと、小野田さんブームをまきおこしたフィリピンについては、その公用語がタガログ語であることなどは、ほとんど知られていない。

そんなわけだから、東南アジア諸国と中国との関係などになると、きわめて恣意的なイメージしかないのである。しかも、わがマスコミは、「中国外交はアジアをバックに」などとしきりに報ずるし、中国も「第三世界」とか「被圧迫民族の側に立つて」とか主張して超大国の論理を拒否するのだと声高に唱えるために、今日、東南アジア諸国の大部分が中国と友好的に外交関係をもっているといふ考えがちである。事実は、ASEAN五カ国（タイ、シンガポール、マレーシア、インドネシア、フィリピン）をとった場合、中国と現に外交関係をもっている国は皆無であり、インドネシアのみが中国と国交をもっていたが、それも九・三〇事件以来、外交断絶のままである。一方、これら諸国は、フィリピンをのぞき、ソ連や東欧諸国とはすでに外交関

係をもっており、フィリピンも昨年モンゴルとさえ国交を樹立している。今日、マニラには『ブラウダ』とタス通信が支局を開設している。米中接近や日中国交があつたというのに、これら諸国と中国との関係がはかばかしく進捗しないのは、私がすでに多くの機会に指摘しているように、まさに中国と東南アジア諸国との関係こそ、近くて遠い複雑な歴史的、民族的、社会的背景をもっているからであり、「中国の影」が拡がれば拡がるほど、「中国問題」は、たとえ華僑問題一つをとってみても、これら諸国の国民形成の課題ともろに結びついた「国内問題」になつてしまふからである。ASEAN諸国を含む東南アジアの十八カ国をとってみても、中国と現に外交関係をもつて北京と相手国の双方に正式

な大使が交換されている国は、ネパール、スリランカ、ビルマの三カ国にしかすぎない。いま、私が例にとつたことは、どちらかというところ、国際関係という目につきやすい次元の問題だが、それさえ、一般には十分に認識されていない。つい先日、シンガポールで東南アジアの国際関係にかんするシンポジウムがあつたとき、日本を代表して出席したあ

る知名の国際政治学者は、レセブションの席上、シンガポールは中国といつ国交を樹立したのか、と質問して、失笑と慚慚を買つたことを私は知っているが、人口の八十数パーセントが中国人である華人社会のシンガポールが、いまシンガポリアンとしての国民形成の途上にあつて、やがて来るべき中国との国交問題にいかに対処しようとするかが課題であるところ、このような質問が日本の国際政治学者から出る始末なのである。どうも私たちは、やれ米中接近だ、やれベトナム和平だ、やれ中国の国連加盟だ、日中国交だといったグローバルなレベルからするアジア認識にとらわれすぎていて、アジアをローカルなレベルにおいてリアルに見る視点を欠いており、アジア各国がいかにも多様で、いかにも複雑な地域環境にあるかを無視しがちである。

そうしたなかで、アジアの反日論が高まっているために、他方では、この反日論についてもきわめて画一的かつイデオロギー的なものがめつてしまふ傾向があるように思われる。そして、最近の特徴の一つは、アジアの反日論を強調するあまり、アジア諸国が今日、日本にたいして正当に期待している日本のアジア

諸国への寄与と貢献、つまり日本の果たすべき役割を全面否定するかのようなアジア認識が目立つことである。もとより、私は、今日のアジアにたいする日本のかかわり方が、そのまま肯定されるべきものとは決して思わない。経済大国の論理をふりまわす日本が、アジアにおいてすでに「敵意」のなかにあること、そして、そのような日本を真剣に考え直す必要があることについてはすでに数年前、一九六九―七一年の私の香港での研究生活の時期にも、いくたびかそれを指摘してきた（たとえば拙稿「アメリカの撤退と『敵意』に囲まれた大國日本」、拙著『中国をみつめて』、文藝春秋刊、所収）。だが一方、国民形成と経済開発という共通の課題を共有するアジア各国に直面している日本の役割にたいして、狭い観念的な「自己否定」の論理をふりかざす最近の一部の傾向的なアジア観は、結局、思いあがった一種の自己満足にしかすぎないように思う。いずれにせよ、私たちはいまや、ギブ・アンド・テイクの尺度のなかで、その割合をどう配分するかといった観点を乗りこえねばならない時期にきているといえよう。

では、そのためには、どのような方向が可能であろうか。経済援助や技術援助の皿と品質の問題、アジア諸国とのコミュニケーション・ギャップの問題、日本人のマナーの問題、留学生の受入れ体制の問題、等等、多くの問題を指摘することはでき、それらの問題についての改善をすみやかに実行すべきことはもちろんだが、これらの問題を改善したからといって、アジア諸国との断絶が早速に埋められるものとは思われない。さしあたり私は、ここでまずなによりも、アジアのローカルなレベルの諸問題についての私たちの認識の欠如を指摘したい。

ところで私自身、この三月の春休みに、東南アジア諸国をまわってきたばかりである。前回の東南アジア訪問は、日中国交にたいするアジア諸国の反応を知るために出かけた一九七二年秋であり、その前はインドシナ情勢がもっとも緊迫していた一九七〇年五月であったが、一年半のブランクののちの今回の旅行は、「国際環境の基礎的研究」を共通テーマとした海外学術調査の一環としての調査旅行としてのものであった。今回は、かねてからの懸案であったボルネオ（東マレーシア）

のサラワク州、サバ州へも足をのばしたが、それは、マレー人と中国人の複合構造をもつマレーシアにおいて、華僑の社会的存在が中国を繞る今日のような国際環境の変化のなかでどのような意味をもつかを知るためであった。それらの調査結果については、いずれ別の機会にゆずらねばならないが、第二次大戦中は日本の占領下にあったこの地も、一九六三年に英領を脱して以来、マレーシア連邦の一州になっている。だが、この地を訪れた者なら誰の眼にも明瞭なことに、いたるところ中国人が実に多い。私がボルネオ第一の都市でサラワク州の首都でもあるクチンに滞いた日は、ちょうど鳳山寺の広澤尊王のお祭りで、クチンの街中をあげてドラや太鼓が鳴りひびき、竜の踊りや西遊記、楊貴妃などの山車が潮州公会とか福州公会とかの中国人の同郷会や宗親会ごとにくりだされて大変な賑わいであった。夕間迫るころは、老若男女が手に手に長く太い線香をかかぎって行列して街を通りぬけていったが、このように、ボルネオの地においても中国文化は排他的に根強く自己主張している。かつてサマセット・モームがこの地を探訪して「作家の手帖」のなか

に印象的に描いたサラワク河口に位置する港市のクチンのみならず、サラワクの主河ラジヤン河に沿ったボルネオ奥地のシブの街も、街のなかは中国人街であり、住民も中国人が圧倒的に多い。もとより、これら中国人がローカル経済の実権を握っている。中国人は客家、福州人、福建人、潮州人の順であるが、このような現実のなかに今日のマレイシアは多民族複合国家としてあるのである。因みに一九六六年の人口統計によれば、サラワク州の総人口八十六万のうち、中国人が三十二・七パーセント、原地人であるイバン族（海ダ

ヤ族）二十九・四パーセント、マレー人一七・九パーセント、陸ダヤ族八・二パーセントとなっていて、中国人が断然第一位である。サラワクで注目すべき最近の事件は、これまでにしばしば現地政府を悩ましていたサラワク・ゲリラの一派が、昨秋以来、そのリーダーをはじめとして大量投降したことであった。インドネシア九・三〇事件で潰滅したといわれたPKI（インドネシア共産党）の残存分がインドネシア領ボルネオに潜んでいて、その影響もあって根強かったといわれたサラワク・ゲリラの投降の理由はまだ必ずしもは

児童相談公開

- 一、知能、性格、学力などの問題
 - 一、申込場所 新宿区戸山町四二 第一文学部心理学教室
 - 一、校友の子弟に限ります
 - 一、申込順に来談日を当教室より指定します
- ハガキにて氏名、年齢、問題の概要をお書きください
- 一、相談料 無料（ただし、テストを実施した場合はその実費をいただくことがあります）

っきりしていない。だが、これらのゲリラもすべて中国人なのである。ここにも、アジアに拡がる「中国の影」がアジアのローカルな現実においては、いかなる陰影をもっているかが示しだされているといわねばならない。私は、クチンから二十二キロ南ヘジャングルを入ったスグ村の陸ダヤ族が住む高床長屋も探訪し、かつては首狩り族だったダヤ族が（それゆえに彼らは他部族の襲撃にそなえて集団で竹製の高床の長屋 Long House に住む）今日、文明の波に洗われて狩猟生活から定着の焼畑農耕さらに陸稲の栽培にまでいたり、男はクチンの工場に出稼ぎに行っている者が多いことを知ったが、クチンのサラワク博物館付風インフォメーション・センターに働く流暢で正確な英語を話す美しい案内嬢は陸ダヤ族だと自己紹介されて、むしろこの中国人の方がはるかに伝統的・守旧的であることを実感せざるを得なかった。マレイシアと一口にいっても、このようなローカルな現実がそこには活きているのである。

（東京外語大助教授・学園講師）